

2

Topics

## 日本の赤ちゃんに朗報! 新登場「ロタウイルスワクチン」とは?

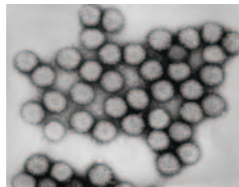
乳幼児の下痢症のおもな原因はロタウイルスです。ロタウイルスは感染力が強く、世界中でほぼすべての小児が感染します。日本でも、毎年、多くの乳幼児が感染し、受診や入院が必要になります。予防には「ロタウイルスワクチン」が有効で、すでに世界中で使用されています。日本でも今年の冬の流行シーズンを前に早期発売が期待されています。

### ロタウイルス胃腸炎の現状

ロタウイルスは、感染力が非常に強く、先進国、発展途上国を問わず世界中で蔓延し、ほぼすべての小児が感染します。生後6か月から2歳をピークにかかりやすく、5歳までに95%以上の乳幼児が感染し、胃腸炎を発症します。ロタウイルス胃腸炎は、軽症でも嘔吐を伴う水様性の下痢を繰り返す、たいへん辛い感染症です。さらに症状が続くとけいれんや脳炎など重症化する危険性もあります。

米国におけるロタウイルスサーベイランスでは、入院症例が年間55,000~70,000件、救急外来受診者約20万~27万人、外来受診者が41万人にのぼりました。日本国内全体のサーベイランスシステムは整備されていませんが、研究レベルでの調査報告から、死亡は毎年10人弱、5歳未満の入院は年間26,000人~78,000人、6歳未満の小児の外来受診者は年間約80万人と推計されています。

ロタウイルス胃腸炎にかかると、水分補給と電解質の補正が中心の対症療法が治療の基本となります。軽症から中等度の場合は経口補液と食事療法がおこなわれ、症状がすすむと眼や頬が陥没し、脱水、意識障害がおこり、点滴による補液がおこなわれます。治療が遅れにより合併症をおこし、重度の脱水のほか、脳炎・脳症を起こすこともあり、最悪の場合は命にかかります。乳幼児の脳炎・脳症は、インフルエンザウイルス、HHV-6,7(突発性発疹の原因ウイルス)に次いでロタウイルスが多く、その予後も悪いことが報告されています。



Dr Erskine Palmer/Centers for Disease Control and Prevention Atlanta, GA, USA

### 医療機関や保育所で求められるロタウイルス対策

ロタウイルスは、感染力が強く、冬のシーズンにしばしば医療機関や集団保育の施設内で流行します。理由としては、排便から排出されるウイルス粒子が多く、数日間から数週間にわたってウイルスがついたおもちゃなどからも感染するなどがあげられます。また、発症前からロタウイルスの排出が始まり発症後も持続しますので、予測することもできません。そのため、いくらか衛生環境を改善しても蔓延は避けられません。

保育園でひとたびロタウイルスが発症すると、園児に感染が広がり、多くの乳児が受診し、入院しないまでも自宅療養が必要となります。流行ウイルスの血清型が変化するため、ひとりの小児が乳幼児期に何度もロタウイルスに感染しますし、流行は毎年繰り返されます。この点からも仕事をもつ保護者にとっては、冬季のロタウイルスの流行は大きな負担となります。

### ロタウイルスワクチンの安全性と予防効果

ロタウイルス胃腸炎は、毎年流行を繰り返す、受診や入院が必要なケースも少なくありません。ウイルスに対する治療薬がないため、ワクチンによる予防が重要です。

1998年に米国でいわば初代のロタウイルスワクチン「ロタシールド」が開発されましたが、腸重積の副作用報告があり、発売中止を余儀なくされてしまいました。その後、2種類のロタウイルスワクチン(「ロタリックス」「ロタテック」)が開発され、接種時期を守ることで安全に使用されています。2004年の発売以来、これら2つのワクチンが100カ国以上の地域で使用され、点滴や入院が必要な重症例を90%以上減少しています。

また2009年6月には、世界保健機関(WHO)がロタウイルスワクチンを子どもの最重要ワクチンのひとつに指定し、乳児に対する定期接種ワクチンに導入することを推奨しています。



### ロタウイルスワクチンは、生後2か月から同時接種

日本では、現在、2種類のロタウイルスワクチンが発売準備中です。ワクチンは、つらい下痢症状から子どもたちを守るだけでなく、保護者や医療者の負担も軽くなりますので、一刻も早い発売が期待されます。

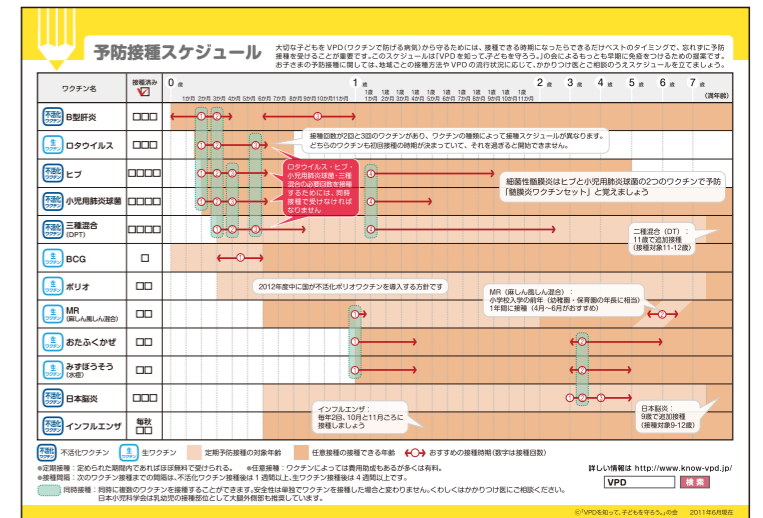
実際に日本の子どもたちがワクチンの恩恵を受けるには、初回接種から必要回数まで決められたスケジュールで受け終わらなければなりません。現在、生後6か月までに接種するワクチンは、ヒブ、小児用肺炎球菌、三種混合など5種類があり、単独接種では10回を超える接種をしています。新たにロタウイルスワクチン(生ワクチン)が加わり、これらのワクチンすべてを単独接種で適切な時期に接種することは不可能です。

ほかのワクチン同様、ロタワクチンを接種するためには、できるだけ早い月齢(生後2か月)から接種を開始すること、さらには同時接種で受けることが必要です。生後2か月では、かかりつけの小児科が決まっていなくても、いかに早く情報を届け、小児科での予防接種をスタートするかが今後の課題といえます。

接種スケジュール(米国)			
ワクチン名	接種開始の年齢	接種間隔と回数	接種完了の年齢
ロタテック(MSD社)	生後6週から(初回接種は生後6~12週)	4-10週間隔で合計3回接種	3回目は生後8か月(32週)までに完了
ロタリックス(GSK社)	生後6週から	最低4週間隔で合計2回接種	2回目は生後6か月(24週)までに投与を完了

### ロタウイルスワクチンを上手に、安心して受けるために—予防接種スケジュールを改訂しました

ロタウイルスワクチンは、生後2か月から接種を始め、決められた期間に2回または3回接種をしなければなりません。同じ時期に受けるワクチンには、B型肝炎、小児用肺炎球菌、ヒブ、三種混合があり、接種回数をきちんと受けるためには、同時接種が前提となります。ロタウイルスワクチン発売に先立ちまして「VPDを知って、子どもを守ろう。」の会おすすめ予防接種スケジュールを改訂し、ウェブサイト『KNOW★VPD!』にて公開しています。あわせて「同時接種の必要性・安全性」情報をQ&A形式で掲載しています。



3

Report

## 会の活動をご報告します。(2011年2月~6月)

### 第4回「VPDを知って、子どもを守ろう。」の会総会開催

2011年4月16日(土)に東京都中央区・「VPDを知って、子どもを守ろう。」の会事務局会議室にて第4回総会を開催しました。日本小児科学会の延期により会員向けセミナーの中止や会場変更などありましたが、無事に開催に至りました。

### 第6回「VPDを知って、子どもを守ろう。」の会プレスセミナー開催

2011年6月17日(金)に東京都千代田区・東京ステーションコンファレンスにて第6回プレスセミナーを開催しました。今回のテーマは、「日本の赤ちゃんに朗報! 新登場「ロタウイルスワクチン」とは?」。ゲスト講演は当会の会員でもある大阪労災病院小児科部長の川村尚久先生です。ロタウイルス胃腸炎の実態や治療を通じてのロタウイルスワクチンの有効性についてご講演いただきました。

パネルディスカッションでは、「ロタウイルスワクチンを上手に、安心して受けるために」について、運営委員代表・菌部友良先生の進行のもと、川村先生、運営委員の太田文夫先生、片岡正先生がご自身のロタウイルス胃腸炎の患者さんのご経験やロタウイルスワクチンを含めた同時接種に対する取り組みなどを紹介しました。質疑応答では、出席した約40名のメディア関係者と活発な意見交換が行われました。

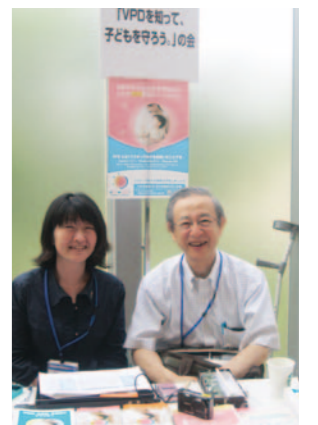


#### 出演&記事&取材協力(2011.2-2011.6)

- フジテレビ「知りたがり」(2011.03.11)
- YAHOOニュース(2011.03.07)
- Happy Note 2011夏号 Vol.27 (2011.06.10)
- 保健所支援情報システム(2011.03.11)
- ワクチンナビ(2011.02.06)
- 愛育ネット(2011.06.08)
- 携帯情報サイト「Hahaco (ハハコ)」(2011.4.06)
- 吉備医師会会報(2011.04.11)

### 第22回日本小児科医会総会フォーラム ブース出展

6月11日(土)・12日(日)に岐阜県岐阜市で開催されました日本小児科医会総会フォーラムにおきまして、患者会ブースの並びにブースを出展しました。会の活動の紹介や会員募集を行うとともに、隣席の「細菌性髄膜炎から子どもたちを守る会」「ポリオの会」の方と情報交換をしました。(写真は、「細菌性髄膜炎から子どもたちを守る会」代表の田中美紀さんと菌部先生)



- 朝日新聞医療サイト「アピタル」(2011.05.16・06.24)
- 国立国会図書館 日本全国書誌2011年9号(2011.03.11)
- NPO法人子育てすこやかサークル「すこやか通信」24号(2011.02.07)
- 神奈川県「家庭的保育事業研修用教材」(2011.03.20)